

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。

## 仏性論の研究

藤井大俊

本論は大正藏經本には、「天親菩薩造」とあり、この

外、著者名を収録した経録は開元録でも貞元録でも、何れも皆「仏性論四卷天親菩薩造」とあり、本論が従来の説に従つて世親の著作であることは間違いないであろう。しかし、宋、元、明の三本及び宮内省本には「天親菩薩説」とあり、この「説」とあるに係づけて、最近、世親は本論の主意のみを説き、役人が無上依縁を取り入れて、これを編纂敷衍したのが現存の仏性論であるという新説が「日本仏教学協会年報」に発表されたが、これには尚、異論もあり、復た末だ学界の定説ともなっていないから、「造」とあつても「説」とあつても大の間に本質的な区別がある訳ではないであらう。

世親の如來藏思想は、弥勒の大乗壯嚴藏經論頌、中辺分別論頌及び無著の攝大乘論等を註釈する間に自了真實唯識説に通達すると同時に又、如來藏緣起説をも知るようになり、更に始末藏經、不增不减經、無上依縁を讀み或は十地經論、勝鬘經論等を作製するに及んで益々その考えが纏められ、遂にそれが組織体系化されるに到つたのが、この「仏性論」であると云える。

本論が真諦三藏の禪訳であることに就いては、法華錄

三宝記号を初め諸経録が記しているように、少しの疑いも無いが、その訳出の年月及び場所に関しては、何れの経録も何等記述する所が無いから、これを明確にすることは出来ない。唯僅かに譯訳者の名前が、「陳天竺三藏真諦訳」となつて居り、又開元録も梁代の処ではなく陳代の場所にこの仏性論を記載している事等からして、梁代ではなく陳代になつてからの訳出と推定し得りに過ぎない。しかし宇井博士は無上依経以後と見て五五七年から五六九年の間に訳出せられたとしている。

仏性論の梗概を述べんとする趣意は、一方に於ては、内容説の概要を見んとするのであるが、同時に、他方に於ては、無上依経に基を有して、而も実性論の典拠となつて居る点を、多少なりとも明かすことになる。特に本論と無上依経、宝性論を対照した如く、一經二論の間に最も密接な関係のあることは擗うべくもない事実である。時には宝性論に於てよく理解せられ難い所も、仏性論を参照すれば理解せられ得るに到る如き場合が存する。此点からは、宝性論が仏性論に拠つて居ることを拒むを得ないもので、決して仏性論が宝性論に拠つたとは考えら

れないことであるとの説も出てくるのであるが、仏性論は宝性論の後でまとめられたと見る方がよいかもしれない。又、偶然に一致したのであるとも見られないこともないし、更に同一源泉から二論となつて来たものと見なすことも出来るようである。宝性論、無上依経、仏性論の三者の何れが先後であるかは決定的に断定することは不可能であるが、宝性論をも含めてこの仏性論は如来藏説の纏つた論述をなしたものの恐らく最初の論であろうと考えられ、その影響は大なるものとなつたといわねばならぬものである。世相の教學全体から見ても、仏性論が何れの地位にあるかは、古来の異説もあるので、簡単に論ぜられないが、一乗説をなす点は最も重要視せられることになるであらう。世親は経論に註解の數多くを造つた人であり、法華論、往生論の如き重要なものがあるが、独立の自著としては、唯識二十論、唯識三十頌と仏性論などであらうし、唯識の論は唯識の註釈を造つた以後の作であると見るとすれば、恐らく一生の後期に属すべく、仏性論も、又後期に属すといえるであらうと思われる。仏性論には三昧門の唯識を予想して居ることは

示されている。宝性論には、唯識の考えが殆んど全く無いのは、如何なる所以か、判明しない所であるが、しかし全く知らなかつたとは考えられないから、如来藏説の正しい系統としては、唯識説と必ずしも混じらないという以前からの流れを守つた為であらう。

ともかく、「仏性論」が仏性思想の旅れの中において最も重要なポイントをなくしていることは言うまでもない。他の諸大乘経論との関係づけにおいて、今後より一層の究明を続けてゆかなければならないことは言うまでもないことである。

## 仏教の根本思想について

柴田正雄

人類の師と仰がれる歴史的人格としての釈尊は実際にはいかなる生涯を送り、いかなることを説いたのであらうか、当時のインドの社会には一つの大きな変動期が訪れ

ていた。ガンヂス河上流地方に定住していたアーリア人はその後次第に東方に進出し、その中流地方に移住したが、それと共に社会的文化的に大きな目ざましい変動が起つた。

まずアーリア人と先住民族との混血が盛んに行われた。ここに形成された新たな民族はもはやアーリア人の伝統的な風習儀礼を忠実に遵守しようとはしないで、彼等はヴェーダ文化を無視し、アーリア系の崩れた俗悟（*モグハル*）を使用していた。かれらの定住した地方は地味肥沃で多量の農産物を産出したために、かれらの物質的生活は豊で、物資が豊富になるとともに、商工業が盛んとなり、多数の小都市を成立せしめるに至つた。最初はこの小都市を中心に群小國家が多数併存し、そのうち或るものは貴族政治或いは共和政治を行つていたがそれらは次第に國王の統治する大國に併合されていく趨勢にあつた。大國の首都は繁榮し、そこには壮大な都市が建設された。當時はコーサラ、マガダ、アヴァンティ、ヴァンサの四大國が最も有力であつた。

これらの大國に於ては王權がいちじるしく伸張し、王